私の研究

私にとっての研究の醍醐味

初めて研究なるものの一端に触れたのは学部四回生の時になる。とにかく面白そうなことを研究している先生につこうと思い選んだのが、機械科ではあるが、冶金系の研究室であった。

元々大学院への進学を希望していたことから、次の年に使う試験機を同じグループの同級生三人で設計することになった。当時の金額で付属装置全部を含めて五百万円ほどをかけたと記憶している。いくら力学と設計を学んだとは言え、素人に研究室の予算の大半をかけてこれからの研究のメインに使う試験機の設計をさせるとは、こちらにとってみればとんでもないプレッシャーだった。当の先生曰く、「まかせた」。

他の研究室でも、試験機などの設計製作は日常的に行われていた。いろいろと理由はあるのだが、研究目的に合致する試験機は自分で作らない限りは手に入れることができないこと、類似の試験機を購入するとその数倍の金額がかかり、また、その試験機を改造しないと使い物にならないことなどである。しかし、一番の理由はうちの先生は設計も図面も全くわからなかったことが原因なのかもしれない。

今でも思い出すのは数ヶ月かかって数十枚の図面を書き上げて外注した時のほんとにこれでよいのか、という不安感と、そして自分達が考えた試験機が完成し、工場の片隅に鎮座しているのを見た時の感激。この試験機を使って、博士前期そして後期課程の研究を行った。使うにつれて愛着もわいたが、その反面、使いにくさ、別の言い方をすると設計のまずさ、を実感した。しかし、それにもまして自分の研究をするために必要な装置を自ら考え作り出し、それを用いて実験をするというおもしろさを先生に教えてもらったのだと思う。

それ以来、治具類も含めて大小いろいろな装置を設計また自ら製作して研究に使ってきた。写真にあるのは進行中の、加圧焼結における金属粉末の緻密化挙動の研究に使っている真空ホットプレス装置である。自作装置の常で所期の性能を出すための調整に数ヶ月かかったが、これほどの精度と能力を持つ装置は世の中には無いと自負している。あとは自分のアイデア／能力次第、でしょうか……。

さて、また実験室にでも行ってきましょうか。

磯西　和夫（教育学部助教授）

研究姿勢と方法

このようなコラムを書く人は、自分の研究あるいは自分の学問を信じ、そして愛している人が一番望ましい。そのような意味で私は一番不適切である。

私の研究領域は社会科学の中の一分野である経済学である。その中でも日本で言うところの近代経済学である。この近代経済学の分野では特に自分の研究を信じて日夜没頭している人が多い。別な言い方をすれば、自分の信念を信じることと、自分が行っている研究方法との明確な違いを混同している人が多い。

経済学は社会科学であるから、主観的な部分を無視することはできない。むしろ、その主観的な主張、あるいは信念が一番重要である。経済学を信じてはいけない、しかしその経済学で信念を貫く、というのがこれまでの私の研究姿勢である。

近代経済学が提供するものは一つの分析手法であり、社会を如何にみていくかという点でただの道具の提供でしかない。経済学者が真に問われるべきものは、その道具が如何に美しいかではなく、その道具を簡単に使って如何に社会を洞察するかという点である。

私が研究活動をしたいと思った大きなきっかけは、大学時代の恩師の言葉である。私の恩師はドイツ労働運動史が専門で、所謂マルクス経済学の専門家である。ゼミでは資本論、あるいはその解説書である平田氏のコメンタールなどを輪読していた。その恩師が経済学者はどうあるべきかということを熱弁してくださって以来、私の研究意識は一貫している。ただ、大学時代の恩師と異なっているのは、使っている道具の違いである。

井上靖氏の小説に三人の異なった僧侶が出てくる小説がある。山にこもるべきか、町に降りて社会で説くべきか、あるいは時の政治を使って改革を行うべきかと言う三人の僧侶である。心情的には一番目の僧侶が私の理想である。しかし一方で、何のために社会科学を研究しているかと考えると、未だに自分自身の方向がはっきりしない。

私は後者二つのタイプも選択できるようにと、近代経済学の手法を選択した。この優柔不断な姿勢は現在の研究対象にも及んでいる。年金、医療、財政赤字とあまりにも手を広げすぎている。ただ、ここで弁明することが許されているのであれば、大学院時代に祖父と二人で住みながら彼の介護を自分の手で行ったという経験が一貫した研究意識を支えている。高齢者が安心して生活できる社会を如何に実現するかと言う問題意識である。この実現に博愛的主張は役に立たない。昔の経済学者が言ったように、熱い心と明晰な分析が必要である。

加藤　竜太（経済学部助教授）